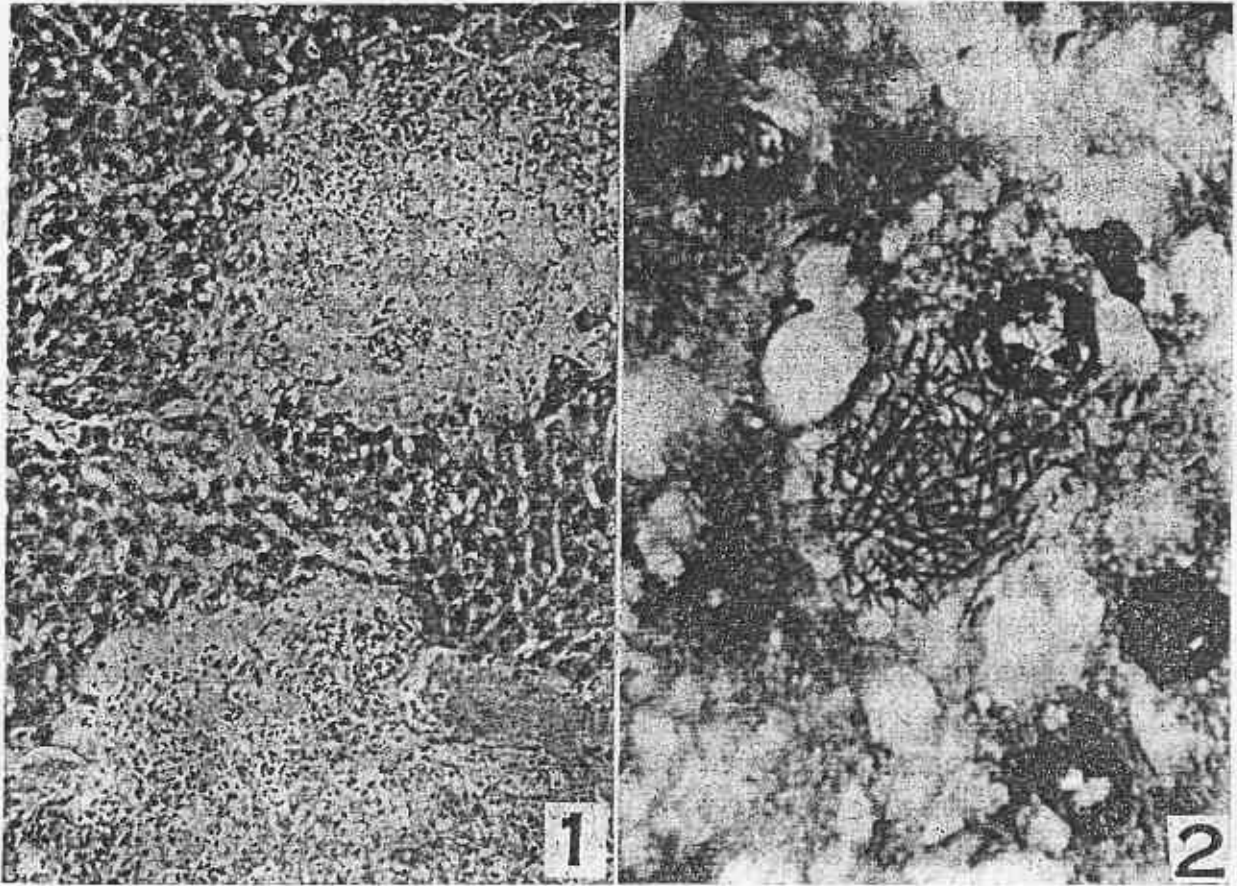


日 生 研 究 報 告

第 9 卷 昭 和 38 年 4 月 第 4 号



マウスの TYZZER 氏 病

東大伝研獣医学研究部出題・第 2 回獣医病理学研修会標本 No. 29. A, B.

1917 年に Tyzzer が死亡率の高いマウスの流行病をしらべて、肝細胞あるいは腸粘膜上皮細胞内にみられる特異な桿菌様体を *B. piliformis* と記載した。その後自然発生例についていくつかの報告があるが、原因菌の分離培養が確立されていないのでこの病気の診断は現在のところ、肝の巣状壊死、病巣肝細胞内桿菌様体の確認など病理組織学的検索によるほかない。実験的にこのような病変をつくるためには病肝乳剤の接種によるが、確実に致死的な転帰を得るためには病肝乳剤とともにコーチゾンの投与を必要とする。しかし、接種マウスにおける病変発現の程度およびコーチゾン併用時の死亡率は、接種材料中に含まれる桿菌様体の数とよく平行する。写真はコーチゾン併用の実験的感染例の肝材料である。

約 10,000 ケの桿菌様体を含む病肝乳剤の静脈内接種の場合肝壊死巣は接種 2 日後に可視的となり、2.5mg のコーチゾン筋肉内同時投与の場合には数日後に壊死巣が密発して死亡する。肝壊死巣の大きさはまちまちであるが最大のものでゴマ粒大であり、鏡下ではほぼ円形の明るい壊死巣である。中心部に多形核白血球の浸潤をとまな

うことがあるが周囲の反応は乏しい。壊死巣発現の位置は門脈、肝静脈周が多いが包膜直下にも病巣がみられる特長な肝細胞内の桿菌様体は壊死巣中心部には一般に少なく壊死部に接した肝細胞原形質内に密在することが多い。この小体はチオニン、メチレンブルーに好染し PAS 陽性でグラム陰性、非抗酸性である。Levaditi 硝酸銀法によつて黒染し超薄切片電顕像によつても電子密度の高い桿状体として肝細胞細胞質内に識別される。細胞依存性に関して肝細胞のほか径口接種時の廻盲部粘膜上皮細胞、脳内接種時の神経細胞との関係についても興味ある所見がえられているので検討中である。

自然発生例で重篤な経過をとる場合に、原因菌と宿主のほかには何らかの要因が介在していることは、誘発実験の成績からも推察されるので、宿主・寄生体関係と第 3 の要因—実験的にはコーチゾンの作用で表現される—の複雑な三角関係がいわゆる Tyzzer 病の本態と考えられるが、目下それぞれの相互関係を追究しつつある段階である。